大名の数寄　－ 茶の湯 －

平成29年4月4日（火）～7月2日（日）

Ａ：4月4日（火）～5月7日（日）　Ｂ：5月9日（火）～6月6日（火）　Ｃ：6月7日（水）～7月2日（日）

桃山時代に武将の間でも流行した「侘び茶の湯」は、江戸時代には「御数寄屋（おすきや）」の接待として、公式行事の一部に組み入れられた。こうして固定された茶の湯は、「侘び茶の湯」の持っていた、美や新たな価値観をうち立てて行く自由な創造の精神を失って武家故実となり、格式行事と化した。大名は邸に茶室を設け、将軍の「御成（おなり）」をはじめ、晴の行事に備えた。

茶の湯道具もまた格式道具となった。桃山時代に武将や上層町衆や数寄者（すきしゃ）が持っていた道具の大半は、江戸時代には将軍や大名の秘蔵品となり、「名物」の道具は、時に一国一城にもあたるとされ、その所持、非所持が家の格を表すとまで評された。

凡例：◎は重要文化財、＊は個人蔵、それ以外は全て徳川美術館蔵

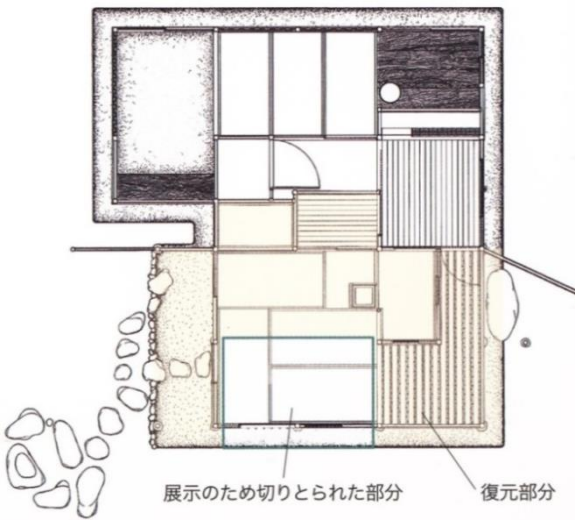
No.		名　　称	作者・所用者など	時代	世紀	期間	所蔵
猿面茶室							
1		和歌懐紙「ほとゝきす」	徳川宗睦(尾張家9代)筆	江戸	18	A	
2		和歌懐紙「砌橘」	正徹筆	室町	15	B	
3		青磁算木手花生		南宋	13	AB	
4		北室菊桐文釜		江戸	17	AB	
5		染付花蝶文獅子耳水指		明-清	17	AB	
6		古薩摩茄子茶入　銘 横雲		桃山-江戸	17	AB	
7		竹茶杓　銘 男山	仙叟宗室(臘月庵･裏千家4代)作	江戸	17	AB	
8		井戸茶碗		朝鮮王朝	16	AB	
9		和歌色紙「よし野山」	豊臣秀頼筆　加賀前田家伝来	江戸	17	A	＊
10		蓮に乙鳥図　三幅対の内	徳川光友(尾張家2代)筆	江戸	17	A	
11		竺仙梵僊墨蹟「与照侍者語」	徳川家継(7代将軍)･徳川継友(尾張家6代)所用	鎌倉	14	B	
12	◎	柳燕図	伝牧谿筆　徳川綱吉(5代将軍)･徳川光友(尾張家2代)所用	南宋-元	13	B	
13		和歌色紙「神風や」	徳川秀忠(2代将軍)筆 藤田家･森川勘一郎(如春庵)旧蔵	桃山-江戸	16-17	C	
14		満畦生意図	蕭山陳佑筆	明	15	C	
15		唐銅獣耳中蕪花生		元-明	14-15		
16		三島牡丹文俵形花生		朝鮮王朝	15-16		
17		青磁大水指		元-明	14-15		
18		唐物茶壺　銘 安国寺	徳川家康[駿府御分物]･徳川義直(尾張家初代)所用	元-明	14-15		
19		唐物筋釣付茶入		南宋-元	13-14		

No.		名　　称	作者・所用者など	時代	世紀	期間	所蔵
20		古瀬戸肩衝茶入　銘 筒井　大名物	筒井順慶·徳川家康· 徳川義直(尾張家初代)所用	室町	15		
21		青磁薄茶器		明	15-16		
22	◎	白天目　大名物	武野紹鷗·武野仲定· 徳川義直(尾張家初代)所用	室町	15-16		
23		油滴天目(星建盞)		南宋	12-13		
24		刷毛目茶碗　銘 白波	岡谷家寄贈	朝鮮王朝	16		
25		金襴手唐子文仙盞瓶		明	16		

特集展示　初夏の茶の湯①　6月7日(水)～7月2日(日)						
26	和漢朗詠集切　夏　更衣	伝藤原行成筆　岡谷家寄贈	平安	11	C	
27	青磁柑子口花生		元-明	14-15	C	
28	芦屋網代釜		江戸	17	C	
29	染付蓮唐草文水指	徳川斉荘(尾張家12代)所用	明	16-17	C	
30	瀬戸夏山春慶茶入		桃山	16	C	
31	竹茶杓　歌銘 窓竹	小堀遠州作	江戸	17	C	
32	斗々屋茶碗　銘 螢	岡谷家寄贈	朝鮮王朝	16	C	

第２展示室のみどころ

猿 面 茶 室



待庵(たいあん)・如庵(じょあん)と並んで茶室として最も古く注目すべき遺構で、国宝にも指定されていたが、昭和20年、戦災にあって亡失。もと清須城内に営まれていたが、慶長15年(1610)、名古屋城内に移築され、上使(じょうし)の接待場にあてられていたと伝える。明治に至って城内の建築物が払い下げられ、明治5年(1872)末森入舟山(現千種区見附町)に移築したが、同13年、名古屋博物館(後の愛知県商品陳列館)にこれを寄付、さらに昭和8年、鶴舞公園内に移し建てられた。

茅葺(かやぶき)屋根の素朴な外観を形成し、内部は四畳半台目、下座床で、茶道口と給仕口を具え、中柱の隣の二枚障子の口の外には広縁を付していた。四畳半に台目構えの点前座を添え加えた間取は、古田織部や小堀遠州の好んだものである。床の横に勝手に通じる二本襖の口を開けることも、織部や織田有楽(うらく)の好みと伝える作例に見出される。またここでは躙口(にじりぐち)が中央寄りに開けられたが、これもまた早く有楽が試みた手法である。広縁を伴っているのも古調を示している。この茶室の作者は、織部あるいは有楽と伝えられるが、詳らかでない。床柱の節の様態が猿面に似ているというのでこの席名が付いた。